


 書評

T. Hamanaka, G.E. Berrios 編

Two Millenia of Psychiatry in West and East

酒井明夫

まず本書の成立の経緯から説明すべきかもしれない。1999 年 3 月、名古屋市立大学医学部において、同大学精神医学講座、濱中淑彦教授（現名誉教授）の主催で 2 日に渡り本書と同名のタイトルで精神医学史の国際シンポジウムが開かれた。西暦 2000 年を間近に控えた世紀の変わり目ということでつけられたタイトルだと思うが、会期中に行われた発表や討論はこのタイトルに負けないすばらしい内容だった。ヨーロッパ、アメリカ、アジアの各国から参加したシンポジストたちが提示した研究成果は、西洋と東洋における精神医学の営みをさまざまな視点から振り返ったもので、2 日間のシンポジウムは全体として通時的にも文化横断的にも非常に興味深い試みだったといえる。

本書はその結晶である。内容は三部に分かれ、それぞれ西洋、東洋の精神医学史、社会・文化的脈絡における精神医学史について数篇の論文が収められている。寄稿者たちはいずれも精神医学史の第一線で活躍中の優れた研究者であり、彼らが一堂に会したこのアンソロジーはそれだけでも価値が高いと言わねばならない。加えて各論文のテーマがきわめて興味をそそられる種類のものである。本書の論文はすべて英語で書かれているが、たとえば第一部の「西洋」に所収の表題を和訳して紹介してみる。

「ガレノスの精神医学」(V.Barras), 「パラケルススと精神医学」(H.Schott), 「イマジナティオ/ハルシナティオ (F.プラッター) からアリユシナシオン/イリュジョン (J.-E.D.エスキロール) へ」(T.Hamanaka), 「ピネルとフランス精神医学の始まり」(J.Pigeaux), 「エミール・クレペリンの臨床精神医学の概念」(P. Hoff), 「精神医学の言語とその歴史」(G.E. Berrios) といったテーマ群はおそらく、西欧の

精神医学史に興味を持つ人だけではなく、およそ精神医学に携わる人すべてにとって見逃せないものだろう。

第二部「東洋」に移っても、「第二次世界大戦前後における韓国精神医学の出自とその発展」(Bou-Yong Rhi), 「江戸時代(17-19 世紀)における日本の伝統的精神医学」(G.Hiruta), 「森田療法の成立と発展」(K.Nakamura), 「日本における精神分析史」(A.Miyoshi and K.Shingu), 「日本の現象学的精神病理学と構造主義的精神病理学」(S.Kato) など刺激的なテーマが並び、これらもまた西洋のそれと同様に魅力的なことに変わりはない。

第三部には社会的な問題を取り扱った論文が収められている。「スキャンダルはいかにして一人の精神科医を作り上げたか」(H.Yamanka), 「戦前の日本の精神医学と優生学」(Y. Nakatani), 「優生学の恐怖」(G.Jeanmonod, J.Gasser and G.Heller), 「20 世紀の精神病院はいかにして悪しきものとなったのか」(J.C. Burnham), 「身体療法と 20 世紀の精神医学」(A.Scully) の 5 篇は、各表題からも論じられている問題の深刻さが伝わってくるが、それらに対する著者たちの論旨は明確であり、しかも視点が斬新である。

残念ながら、肝心の内容をひとつひとつ紹介する余裕がない。しかし評者の最低限の責務として、いずれの論文も読了に値する優れた出来栄であるという保証だけはしておきたい。最後に、本邦でこのような企画が実現したことは画期的なことであることを強調するとともに、編者二人の長年の労力に敬意を表したい。

(岩手医科大学神経精神科)

● A5 変 206 頁 2003 本体 4,000 円 学樹書院刊